Literature cited

Correns, C. 1899. Untersuchungen über die Vermehrung der Laubmoose durch Brutorgane und Stecklinge. 472pp. Jena. Deguchi, H. 1977. Hikobia **8**: 193-196. —— 1978. Journ. Sci. Hiroshima Univ. ser. b. div. 2, **16**: 121-256. Iwatsuki, Z. 1957. Bryologist **60**: 299-310. Lai, M. J. & Wang-Yang, J. R. 1976. Taiwania **21**: 159-203. Noguchi, A. 1967. Journ. Hattori Bot. Lab. **30**: 205-230. —— 1968. Journ. Hattori Bot. Lab. **31**: 113-129. Sainsbury, G. O. K. 1935. Journ. & Proc. Roy. Soc. N. S. W. **69**: 86-104. Saito, K. 1970. Misc. Bryol. Lichenol. **5**: 91-92. Une, K. 1984. Journ. Hattori Bot. Lab. **56**: 123-132. —— 1985a. Journ. Hattori Bot. Lab. **59**: 487-513. —— 1985b. Journ. Hattori Bot. Lab. **59**: 515-521. Vitt, D. H. 1983. Journ. Hattori Bot. Lab. **54**: 1-94.

* * * *

樹幹や岩上に比較的普通にみられるヒメミノゴケに，これまで知られていなかった無性芽を見いだした。無性芽は葉身上に形成され，2-50細胞からなる糸状で，細胞壁は厚く外側は粘液質に包まれている。本種の無性芽の大きな特徴は，無性芽の始源細胞が葉身細胞内に内生的に発生する点で，それが葉身細胞外に伸長して糸状の多細胞性無性芽となる。このような内生的発生をする無性芽は蘚苔類では非常に稀である。また，濾紙上で培養した結果，極めて高い発芽率と配偶体形成率を示した。本種は雌雄異株であり，雄には正常型のものと矮雄との二型がある。無性芽はおもに雌植物体上に形成され，正常型の雄には極めて稀に見い出されるが，矮雄には見られなかった。一方，無性芽をつけた標本はほとんどが渓谷や流れの近くで採集されたものであり，本種の無性芽形成は高い湿度条件下で起こると考えられる。

□松崎芳郎（編・著）：**年表・茶の世界史** 330pp. 1985. 八坂書房，東京. ¥6,800. 著者は大東文化大学卒業後，茶業組合中央会議所に勤務し，茶に関する出版物の収集・整理をしていた頃のメモをいかして年表を作った。第2部は茶の世界小史で，中国，日本，西欧諸国とまとめ，最後に二十世紀の動向を記す。参考文献，人名索引あり。

（木村陽二郎）